



夕  
顔

空  
蟬

一葉抄卷二

空蝉 并一

<sup>花</sup>道乃依ハ先極ヨリて在るに似たり  
 花の物徳乃〜但い物徳より成りて  
 此れ道有は乃〜ハ一書〜書ハ乃  
 申と〜乃〜乃〜乃〜乃〜乃〜乃  
 うあ〜又一春乃中〜後〜乃〜乃  
 あり未摘花を〜初ハ〜同時乃事  
 と書〜事ハ乃〜乃〜乃〜乃〜乃  
 乃〜乃〜乃〜乃〜乃〜乃  
 の名ハ乃〜乃〜乃〜乃〜乃

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

このとちあつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あつたはねまふふ　　ちかあのまのま

あはれい ちのさの言りしむひてあふ  
あはれい

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

あはれい ちのさの言りしむひてあふ

色世相あり見合てうらみしはぬる侍  
別と書てのふりかてえとよまふた  
とらぬけはくろぬるや

うらみら ら ら ら ら ら ら ら ら ら  
ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら  
さうりし 髪の ら ら ら ら ら ら ら ら ら

おしく見ぬくらうけのぬけくも  
行くみぬとかくゆくとくしてのけ  
とくもやと人の性法とくもゆ  
かしりさしはまきり かし有はまぬらとく  
さうりし ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら

行くの人を 思 の 言 り じ ら る 人 と は は は

か竹も向乃あまてすうとらふて東  
のかりし丹まらぬや

せこいらし 花 ら は 地 と 又 持 り う ら ら あ り  
いてこのさひ 彩 の の 疾 の と 疾 き り  
とく さ の ゆ ひ ま て う り た か の あ り と ん  
前の巻とあり ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら

作よせゆきとてぬし 花 た 花 集

おちあを た か の ゆ き の 技 の  
た八右丸中 た か の あ り と ん  
誰病 さ の あ り と ん  
ちほよ あ り と ん 書 の あ り



まら 花 丸八首男女の通稱くもの道なりい

よみあし

風吹そはは 何 風うけく人よはらひてそ

さしのもんとましりひてしや

さ見のうけて ア ちんもの道たれまを

あまのうけかや一依屏風を三用し

木下たさのりあけちりや **開**や

やううぬく ア 倭よりさめし

まへりともくし

まはりぬ木のみき 何 ちのめひのりめし

くさしてまののちりしりける

夏は春のぬとなりりしり

ゆりまの海のりしり

見ちりさ ア ちりさ

のちりさ ア ちりさ

ハ着りりらちりさ

のちりさ

りちりさ ア ちりさ

みちりさ

のえり ア ちりさ

ちりさ ア ちりさ

りちりさ ア ちりさ



かたりて行人をよの節の人とらふなり

とくも ぬきとくしとくもなり

のいぬ くるしとくものぬきとくもなり

や捕のちりしぬなり そ 老人の深氏和のま

はとくしとくひてつとく又とくしとくし捕

の法府とくまげとくものつとくしとくし見

のやまらとくしとくし高とくか府りとくま

深氏とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

のや捕のちりしぬなり そ 老人の深氏和のま

じとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし そ 老人の深氏和のま

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

室稔の才とくしては 稔の才めけさるる

才とくしてはのらなるはよるのらなる

人してはせいのこいせいのこいせいのこい

貴くはこいせいのこいせいのこいせいのこい

かひくしてはけしきして 大言せぬまはる

けしきしてはけしきしてはけしきしてはけしき

けしきしてはけしきしてはけしきしてはけしき

けしきしてはけしきしてはけしきしてはけしき

人か けしきしてはけしき

かひくしてはけしきしてはけしきしてはけしき

けしきしてはけしきしてはけしきしてはけしき

きくははは氏のやけしきしてはけしきしては

けしきしてはけしき

たかき 保氏のやけしきしてはけしきしては

けしきしてはけしきしてはけしきしてはけしき

けしきしてはけしき

伊勢よのあまの 於麻川伊勢よのあま

ののよ夜まぐりまはけしきしてはけしきしては

あまね人よのあまのあまのあまのあまのあま

てはけしきしてはけしきしてはけしきしてはけしき

あまね人よのあまのあまのあまのあまのあま

てはけしきしてはけしきしてはけしきしてはけしき

あつたての  
ありしもの  
ありしもの  
ありしもの

久頼 並二

春名公等と詔を奉りて年次源氏を  
十二日未だ夏より十月まで此の月を  
うまきと名に並しなり

久保海人の清曲のありて 久保は息  
前乃事なりめでしむいせり

めりし 源氏乃清めりし 皇子は例たハ  
二人をよみ親をたはしむる人として  
トの何しとらじ人のあはれむり  
そのとらじち載のこつよよは其の  
りしてのり未摘まらぬえきなり

じつげなる さむらひぬらうのト素  
色つらむらひし

ちうそ見 そトハうらむ板すくうらして

うらむ見とほりて外あつちうらうぬ

ゆとり車も半幕とありうのう

見とありとあつはまうらうらうら

すくうらうらう うら 伊又屋又やうら

うら

うらうらう うら うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

うらうらう うら じつげなる方路のうら

うらうらうらうら

うらうらう うら 其のうらうら

うらうら

うらうらう うら ぬらうらうら

うらうらう うら せせうらうら

うらうらう うら うらうら

うらうらう うら 伊又のうらうら

うらうら

うらうらう うら 板うらうら

うらうら

よのよひよりあまの眉 久親のつやま

の眉は似つかぬよりのひよりとハホおの

まのよよひりりくくらひけけらえらり

よらよら

よらよらよら くらくらを方人はお

見れろのそよよ白くさひらハ何の花

不陸男 一様 おハさうひを除者て六位也ハ

しかり武勇の官せつよあま

このそえも 花 株ちもてい何あり世成

かものはくしんしんくくくくくく

やい西坂西よまふんはんくく

じふくくあぬ おの株葉あぬハ

くくくくくくく ぬくぬくくくくく

くくくくくく

むくくくくくく くの草く又禱り

くくくくくく ぬくぬくくくくく

くくくくくく

くくくくくく 久親の枝れや

ぬむん 不便

あやの あ 文目 あ 書画 あ

くくくくくく くらくらくく

くくくくくく ぬくぬくくく

いじり <sup>れ</sup> 厄よりて戒めし

えのきれ ぬ品浄土に信するこらよまぬ

いしてなり

いふ ぬらぬとてあはれなるにや

いじり

りひひ ぬまじつていなり

ぬまじぬまじ ぬまじぬまじぬまじ

いそいそぬまじぬまじぬまじ

いふ ぬまじぬまじ

ついでにぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじ ぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

人とありて ぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

ぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじぬまじ

おつま ねへ〜

おつま ねへ〜

おつま ねへ〜

りり揚名分三ヶの一ツりり

宮仕人 揚名分の妻のうらかられり

うらなほも うらなほのうらなほ

うらなほのうらなほ

やとつたうらなほ

うらなほのうらなほ

後撰十九巻一のりりあり

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

あつたうらなほのうらなほ

ゆゑにさし流のそまらけり　まらけりとい  
らふに　事りさりぬるも　しりり  
世のねりてやゆりし

うのんごハ　又白鳥のうへ

うも　うもをたひ

ゆり又日乃おりり　ゆりしそまらけり

ゆりり　爰してハ大やうりかクヤ

ありけりまゝこの後　大人の身小細事

とらまはのきさひり

うもりり　軒端の扶乃りり

い御しぬすらと　女娃のうへ

ゆりゆり　年ふけきりり

ゆりゆり　中河の着りて　基り

ゆり事とるゆり　ゆりゆりゆり

て侍あまの同あつて思ひり

る人のいらぬ　あまれ物物のけのりり

まゝあまのんあつてゆりゆりあり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ハリのゆりゆりゆりゆりゆり

まらつれりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆり又言馬頭いらぬハ大

方あまの物ゆりゆりゆりゆり



やほりめい出さるるのりくこのう葉や  
あつはたぐりや

人の心のあはれさへん 人かく有るや

あつはたぐりや

いふりつたあはれさへん 秋の萩

いふ人よあはれさへん 男まさりけさすのん

室懸はるまじしつるあはれさへん

りげの葉つる 葉はるまじつげさへん

はるまじつげさへん

と一言ハ 秋の萩の事なり人の世さ

いふ事つるし

秋の葉つる 秋の萩の事なり

いふ事つるし 秋の萩の事なり

秋の萩の事なり 秋の萩の事なり

秋の萩の事なり 秋の萩の事なり

秋の萩の事なり

秋の萩の事なり 秋の萩の事なり

秋の萩の事なり 秋の萩の事なり

秋の萩の事なり

秋の萩の事なり 秋の萩の事なり

秋の萩の事なり 秋の萩の事なり

秋の萩の事なり 秋の萩の事なり

の表より世も荒れなれば西すまじう  
前首振り 又さうふおのまじいふお  
てころ表のまじや

のいさく 夏ゆくはりのあつらひ  
りく花よふりまてゝ名ハ <sup>ね</sup> 槿よか

つちりあり 毛詩云有女同車顔が

<sup>アサカサ</sup> 薺花あり

りもふりばはめりかひり

りぬよのさうあけはもの中じまーりて

<sup>ね</sup> さうひらりり、童女よりやうハ夏ハ

ひらきまのあまのさうせりちるま

あつしうのうよ界はりぬんくま

ちりめつーきせりあり

<sup>一孫</sup> ぬいさしちりけりぬよと著り

このまじはまのよとハワよとめけて

せまらふつや坊貫ハありまより

ちり事や又さうりちるぬのさうりや

やう袴ハ父知りてまじちり出

ちりけぬのさう又依侍童ハを殿

と人の事よわ

あつて花の信しハ 長今席し菊とゆつ

と人のまのひらまはあつちり

おえりや

うまのつりのふま見 惟光よあ

あいきふよとのまきひつひの

りや

中庭り 中井の事りり

右近君よ 夕顔のめりしの娘りり

うきと人よひくろとていよと

うらの下の初しと少後よとあり

ふく ふあふあふくふあり

うらりふお ちとらほら格あり

おのふふと ぬ後の奥てひらふん

うきき此非や ほうとハもんうりら

君ハ歩りぬ姿と 是ハ右近りり

まのふり初り

ころ移りつと 中おのめらるハ

らんと小舎人きとつとあり夕顔の

着れしととハ中おれとものおとと

足あくととふとひらきりらと

やとととけしとれととと初と

りの長よととり人りや ぬあれお

初し中將の初りりやとと出給と

あつららととととととととと

ゆりしのゆりよ  
まきゆりしハクス龍のふりりうまことまゆ  
とておろしりゆりりうまことまゆ  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま

ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま

ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま

ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま  
ゆりまうしてまゆのありくしうま

今一一人しりしり

り乃法我 かりまぬき

昔有きんぬ乃へん字のきと

三輪明神ハ倭迹ト目百襲姫命

也日本記のハゆほぬ此神のま

ぬ其外神ハ凡そんとしてあつるや

ゆとと姫君ととまは依て云若帯

衣ハ凡そんぬし孰と凡そるし一移

とハとととくろくまれとらとん

巻云若らけの中しとんゆとんは

とととととととととととととと

まろりきふ也あり法衣紐の

注りふふあん 源氏とととと

とととととととととととと

ぬらとととと 唯光とととと

乃ていととととととととと

とひましり 信よとととととと

とひぬしりしり ともひとととと

せよとととととととととととと

申すとととととととととととと

のましりしとととととととと

とととととととととととととと

まぬかし仕ゆりありとぞ  
あつうしとすうしりや事あらん

深き水へりくまて思行なりし

しりぞい 田作りの民業

白くく人 枕のとまり

何乃むきとて 夕顔とて思作り

カウラス 深ぬりりしハ確りハありてしり

白妙の衣より 白妙といひて優く思し

とさきからるは竹 まよらる地

之乃中の 兼色忍遠風同暗壁座

以述月夕を

とらさめは魂よとせ父のあしり

白く今のおぬよる父のよるよと著

あつん し 深きハりくまて

ひいし し 深きハりくまて

ふりてまらる けつひあかりあり

おきりて せりし人のさやくらま

と男のふとつよよ一向しちねりり

らきりくし

あゝぬのありしとねぬ世り

朝露 負名利夕陽愛子孫

見つけし 浦島 ハ金峯山より

枕草子以後りかたけりて思はれん  
けりしとていふもあはれなり  
とあまぬしとていふもあはれなり  
事しとていふもあはれなり  
りていふもあはれなり  
程いふもあはれなり

南無とていふもあはれなり  
尺迦現在観音當来弥勒也弥勒也  
世時地敷金とていふもあはれなり  
如、付属受一生神慶菩薩とていふも  
滅却のりて下生とていふもあはれなり

舎ふ法とていふもあはれなり  
とていふもあはれなり

長生殿のうらみとていふもあはれなり  
在天願作比

翼鳥在比野為連理枝 長根奇

揚妃のぬのへをきりかしてなり

あはれなりとていふもあはれなり 目字と

うらみのすけとていふもあはれなり

元 此まゝ終て書とていふもあはれなり

うらみとていふもあはれなり

或説うらみとていふもあはれなり

きとていふもあはれなり

ふしりくやの折りのくしりくしりく  
ぬしきしりくしりく

ふしりく れ 作ふしりくしりく

あふりり十六日の月 モツキ せりりり

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

はつきりや

あふりりり れ 作ふしりりり

あふりり れ 不意 れ 卒命

あふりりの院 れ 河原院

霧もあふりり 道すしりり

あふりりやふりんの 昔の人をくま

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

あふりりてやふしりくしりく

あふりり れ 誌院別あふりり



まゝのい ちやうくさてわたりしうら

じつちき下家目まで殿とせ 大長

家しつふまひさりさしてらん外

しゆりくはくふめはま

しゆりくはくふめはま 似あぬま

ゆさ中河 鴨鳥のゆさ中川はあえぬ

もあしふらふまよめや

つまぬりのひぬ事とりま

秋のせうあく 里はさく人ばかりの石

りまや危を羅を秋のせうびつ

今らま 別納ハ列建くら屋ハ列細

かく大御食ゆくりたれま事行は

小寝殿より

あうらく 氣凍

あうらく 行へ 行へ

ふとぬりーりり

夕暮りむせらくもあ ひもとくあ

くらまら氣のあうらまこえハ縁

あは光やいよ 夕顔やりけの事

ゆひこのまま

光あうら夕鳥の 扇と物さ

しほの事とまうらまよるり

ハヒガの事ナリトシテその行ハ  
のゆひつるりまきとゆふのよふとあまき  
又と兼次詞しげしうらまけおくる  
せりなくすあはれ目ハ  
おのえりまきとゆふりや

やー ちとくも也卷しゆらめしたる  
うつつあり ちとくも也卷しゆらめしたる  
海乃よりまき 白波のよすり法しせい  
おととぬるぬ所しゆらめしたる  
あひまきたり ちとくも也卷しゆらめしたる  
なうらめりぬらひまきぬらめしたる

乃子とぬらめりまきとゆふりまきとゆふり  
まきとぬらめりまきとゆふりまきとゆふり  
まきのぬらめりまきとゆふりまきとゆふり  
又とぬらめりまきとゆふりまきとゆふり

右進いもん申 ちとくも也卷しゆらめしたる  
りしゆらめり

すしゆらめりまきとゆふりまきとゆふり  
まきのぬらめりまきとゆふりまきとゆふり  
まきのぬらめりまきとゆふりまきとゆふり  
あひまきたり 海氏の事ゆらめしたる  
ぬらめりまきとゆふりまきとゆふり

おしりり申すは、夕氣に位りり人の世  
なりと云ふもの、病者すの元と月かハ  
あまき事とらひあり

うらわし 厨と童りり

とららりりけは、あひりの子欲

蔵人の彼友ありとの世と母首

と拜笑し是のくすか院とてハ

武者所とらひあり

ゆはり ぬはりしむよや

火のや 誰何火行史記 本朝文

粹云 夜行前来之警火回府中

呼曰火危彼誰 漆火

あゝいめんいめん人泣くの殿井戸は  
よりし 其後作良のあゝいめんありおゝいめん

は名湯と云厨とて中殿井戸あり

侍長と云いふ名とて中殿下で名乃

るい次し湯口の殿井戸あり殿井

戸といふ名湯と云厨とて中殿下で名乃

ハ井人ありと云いしとて名の刻書

るはしハいづくも少はぬしとらひ

あり

ろよ さうしけいふるりり

ゆしきくま の字濁れ

ゆんばくしんせく 女名みくろく

ろくろくろりさうり

昔物波りくろく事

寅平法皇と京極中息而回車渡り  
河原院懸貫山川形勢入夜月明令  
取下車疊一假為御座與御息所  
被行房内術之間同塗籠之之殺  
有法皇令回給對云融候欲賜御息  
所法皇答云汝在生之時為臣下祇為

天子何得於此語平早可退歸靈物抱  
御息而御腰半死前雖未皆候中門外  
御意不及達牛童願出侍食石伴  
牛童令百人々差寄御車令乘御々  
息而形々之不能然立奉杖抱乘  
還御之後淨藏大法師令加持終獲  
生

南殿の鬼はりふしの中さあやん

世継云い殿 貞信云い ありまの御時と八光

ゆんばくしんせく 延長朱在院の御時よ  
ろくろりけい 宣旨さげめくせ

やそりいし珠乃座りてしやうしまんを  
小南殿の市帳乃まうくしそはせは  
ののけしひりて歩銀のりつさどそ  
まりなれはりのやうくてさうせは  
小せはしきしやいさよのつめりく  
口のものやうちかし鬼有りさうのり  
ううくやたしりつれさうさう様と  
乃しと今とせまひてやほやけ  
和らけしけりりてさめいさう人  
らうるハやあうゆらさたあしりりん  
さて歩あむしりのことさうさ  
らくさのしさのすもはまたりけ

そくし和沙下りなれはまゝひてしらま  
らくさのしさのすもはまたりけ

のいさういさうのいさうて 右道いさういさ

あつとと海氏のあもあつととあつと  
のいさういさういさうあつとあつと

い男くのりて ありりりり

らりまあるるら 山よはゆりりり

うさうやういさういさういさう

ゆいさういさう 燈のむのいさう

屏風のつゝ 紙りりりりりりりり

らましく ねらういさういさういさう

ふれよあつちりうらなり

おののしき せうりき時いふあぢり

とくさうりん ちんまうさるいぬら

りんまう河のぬり

ふれじくぬよ 藤太の法事

このかたまうせあつちり 海軍のこ

りまうり天比人なる理し可思

いふ法のとて悲しきりせぬささる

花 枯子羨詩話の初持法と化まるいふ

と見れ事 娘字あり

すまやう 備録なるよしむじり

さうと ちん言せりぬらしハらしきゆ

まうり人ハう簡せあつちりいふなり

まうしこのか人う 花 酒狐あつちり

世院ちりし小 唯光うらまはり

くまうく ちんまうことしむ

ちりまう 花 友雛

花 ちりりて腰のうまわつちりなり

かこり かこりくまうなり

くらちりりて 倭人の死らうらまはり

ちり又海氏よまうまうてちりまわ

仲事すまうりいして 久能とのち

ゆかりの八月十六日のより九月八日  
月まで一日より終るまで可今日の御し  
少延びたりておぬるすまうまひん  
じらい 吾れは此の中より用ひ給ひて  
かろくおぬる つよくおぬる  
さらりて 又中におぬるすまうまひん  
おぬるすまうまひん  
ぬいすく 安んじてはよりまひん  
蔵人弁々 又中將のちりすまうまひん  
弁々すまうまひん  
もすまうまひん

ゆかりの御し

ゆかりの御し 在中の御し

ゆかりの御し

ゆかりの御し

ゆかりの御し

ゆかり

ゆかりの御し

ゆかりの御し

ゆかりの御し

ゆかりの御し

ゆかりの御し

あしきんふとふ

板倉のふりつし 東山色乃寺の住

とありあり

ろ乃屋よハ女ひとりりりく終のまらくこの

と乃方り法師もくニ三人物終るり

この言ハ女此あり家の外ハ終る

ぬ念佛りまハ女のしとのまら

終るてぬ念佛

万歳以後抄云表佛事次才葬道以

前至言念佛以ゆま之刻限佛事勤

似経信養事葬道以前日故雖何

今日ハ今夜可勤果也云言念佛得

十五切徳之由見聖教

寺のろやせ 後ハ初夜後乘の長

毎とてゆりりあり

清水の言ハ 七七乘此美清此らとありや

りまといはありりぬありりむ杜待よ

死別已吞終生別常惻々と終るり

生死とてよ別ハ悲しきありり

ワ知乃書そと 深氏のまらせありり

りりりりりりり

はくこのりり 賀茂河の境より防野河使



とつたつと法とくを契茂門のほくも  
とつたつとあり

くまのつと 方と法よりとつとや 故法と  
書あり

くまのつと 服衣も深し

何 法打袖を枕着子くわくし黒く男はく  
くまのつと源光初後成つて清く世物  
彼の白くきり戸くわくけつ後よむて  
巻くゆくと右を初集くけつ又陽塞  
申之着服不可然れりまはけく法打  
袖を枕着子の色ありとすきて教と  
きりけつい申くわくわくく服の依

くまのつとくわくくわくくわくくわく  
相通く字ありしつと通用常のり  
くまのつとくわくくわくく一脱服完れ  
くまのつと服く着申批把方袖を延光一  
生く方着村上く是法服不憚出仕  
くまのつと後成つ世何佛様居く世依  
くまのつと中院中表く色和服の依  
くまのつとあり

一様 昔八か仕くく不憚着くわくく延光  
法子或る法子八六年きくわくわく

くまのつとくわくくわくくわくく

のよきをまて 文法のもじりてて

トのし集りのやうに事なり

廿のてつとやうに事なり 考りの事なり

やうに及せに及くまゝのりて

けいめいの中うくこりて院あり夏の御成

あまのしりりちしきりて事なり

井の白 ちのりて事なり

きりて事なり いものとしの事なり

用なりとて家柄と事なり

うきなりとて事なり

院はいとりの切やうとて事なり

いとりのしお通なりとて事なり

あはれやうとて事なり

りて事なりとて事なり

ふん一依云世名の事なり

かゝぬらりのりなり

事なりとて事なり

物なりとて事なり

きし事なりとて事なり

て思ふ事なり

あまのしりりちしきりて事なり

たりとて事なり

かゝりたりとていふことあり

りくまりしける流乳母 右近の母と父貞  
のめりまりしとていふことあり右近  
母りともまう申じりあまのめりし  
ちとて母うきとの後よりあまのめりし  
いへと人よ 母あまのめりしと人よ  
まきんちうきひてうりあまのめりし  
りくまりして人よのめりしと人よ  
あまのめりしと人よのめりしと人よ  
ゆきまのめりしと人よ  
りくまりのめりしと人よのめりしと人よ

ちうきまりしと人よのめりしと人よ  
か日金の元のけりしと人よのめりし  
りくまりしと人よのめりしと人よ  
ゆきまのめりしと人よのめりしと人よ  
あまのめりしと人よのめりしと人よ  
りくまりしと人よのめりしと人よ

八月九月に長来

声百勢をい時

とていふことあり 伊予のめり

ちうきまりしと人よのめりしと人よ  
あまのめりしと人よのめりしと人よ  
りくまりしと人よのめりしと人よ

こゝろぬきよきかしのさきと 源氏のいふ

やうは宣懐はらゝりてうのさあぬ

み源氏も又うささぬもさうす

おとこしりてうささぬとて源氏のこゝ

やひしひおとこあり

まじぬははししうん ねぬりしむ昔

うらん人とりて我うすむいけうん

りい

いさうらひりいむあひさきし

いけうのりいハ源氏君のふんい

よ事りいこのさうきり

宣懐の母ハ憂也と ちせいの母ハいさ

ちせいの母ハいさちせいの母ハいさ

ちせいの母ハいさちせいの母ハいさ

ちせいの母ハいさ

けうもめけとちせいの母 源氏のいさ

ちせいの母ハいさちせいの母ハいさ

ちせいの母ハいさちせいの母ハいさ

ちせいの母ハいさちせいの母ハいさ

ちせいの母ハいさ

あやちをいさちせいの母 ちせいの母ハいさ

ちせいの母ハいさちせいの母ハいさ

いし行かれしと又いしとて  
くはは歩み入つていしとて

まゝのゆきよふは 歩みよふとていし  
りり歩みよふのいしとて

このあまの秋の萩と かしこいしとて  
ほのこしきしららののこらあまのゆき

ゆきよふ世平り歩みよふのゆきとていしとて  
歩みよふのいしとて 後のいしとて

いしとていしとていしとて  
ららとていしとていしとて

このゆきとていしとて  
いしとていしとて

海氏とていしとて中とていしとて  
まゝの霜はけりよふとていしとて  
るん流海氏のゆきとていしとて  
いしとていしとていしとて  
りよふとていしとていしとて  
いしとていしとて

あつすまん ちりゆきよふとていしとて  
はまのいしとていしとて  
は人もいしとて 十月の日のゆきとて  
いしとていしとて

りくしとていしとて 来生とていしとて

とてしむるあり

又ハ何世しとひしむるはと歎け

ふや詔しぬる袴よるはうまはらふ

世経はくまよりりて 中陰三十九日

半有の多きよりりて者との道論廻

未定に同造佛造經お速津と經文

りあり

此家のりくし世 楊名妻ハ西京に乳母

の嫡女あり妹二人あり一人よつりすと

つみ二人ハのりりらより月も

母房のらぬんよそ 伊み戸ハ女

このまてやけりなりて又内より

つみされあり

きむま 縁のまれむき

あま ちんり

のよはのふらちりや 奥風集ハ女の

衣とよりてりりてくそとて かしを

のこまてしちちちのめりりしり

よとていりり

世のらとちりては ちんりては

そは時節のふりらちりては

てしりらちりちりちりちりちり

あし

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あしこのやま ちかきよせりしとて

あし





